

# 東京の「冒険遊び場」と担い手

## ——「都市空間とジェンダー」の歴史社会学

武田 尚子

(武蔵大学社会学部 教授)

### 1. 冒険遊び場と歴史社会学視点

#### (1) 冒険遊び場とは何か

本稿では東京都における冒険遊び場活動の事例を2つ取り上げ、活動に関するアクターの社会的性格について、都市化の経験と照らし合わせながら、歴史社会的視点で考察する。

冒険遊び場は、1943年にデンマークの造園家が始めた「廃材遊び場」が起源と言われている。子どもは遊具が整った遊び場よりも、がらくた置き場のような場所で遊ぶことを好むことに着目し、子どもの創造性が発揮できる遊び場作りをめざした。第二次大戦後にイギリス国内で広まった。

日本では1970年代後半に関心が広がり、世田谷区の保護者の活動が発展して、1979年に国際児童年記念事業の一つとして、世田谷区立羽根木公園内に冒険遊び場が常設された。これが「羽根木プレーパーク」で、世田谷区が資金と場所を提供し、市民団体によって運営されてきた。1990年代に冒険遊び場に対する関心が高まり、全国で開設活動が活発化した。2003年にNPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」が発足し、活動の情報交換や設置活動の支援を行っている。2010年に「日本冒険遊び場づくり協会」に登録されている冒険遊び場は全国に240カ所あり、そのうち東京都には47カ所ある。現在のところ、全国の冒険遊び場の約5分の1を占めている。

冒険遊び場の運営面と施設面での特徴を確認しておこう。運営の主体は一般的には市民活動団体で、活動場所、運営資金、用具の準備を担当す

る。子どもの遊びの場面には、「プレーリーダー」とよばれる大人が関わり、子どもたちと遊びながら、安全や遊びの内容に気を配る。冒険遊び場は子どもたちの自主性が育つことを重視し、「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーにしている。火や水を使用したり、地面に穴を掘るなど、既存の公園管理方法からはみ出るようなオルタナティブな遊びも行うので、そのような空間利用が可能な場所を広げていくことも、支援する大人が行う活動の一つである。

冒険遊び場活動は、「子どもの遊び方を通して、オルタナティブな空間利用を提案し、実現をめざす社会的活動」と、本稿ではとらえ、考察を進める。

#### (2) 都市型の社会的活動

NPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」に登録されている全国の遊び場は、2010年度は240カ所である。そのうち、首都圏109カ所（そのうち東京都47カ所）、近畿圏51カ所、その他80カ所となっている。冒険遊び場の多くは都市部にある。空き地、緑地の少ない都市部で、子どもをどのように育てるべきかという、都市における生活・教育的課題を反映している。都市部に多く出現した、都市型の社会的活動といえるだろう。

そもそも、日本における冒険遊び場設置の運動は、1970年代半ばに世田谷区で始まった。世田谷在住の大村虔一・璋子夫妻が英国の遊び場を紹介した書籍を翻訳し、近隣やPTA関係者に呼びかけて、1975～76年に世田谷区経堂の緑道建設予定地で、冒険遊び場「経堂こども天国」を実現した。

図表-1 東京都の冒険遊び場 一覧 (2010年)

冒険遊び場と運営団体名	区・市名	開催場所	発足年
四谷冒険あそびの会	新宿区若葉	区立若葉公園	2004
新宿・戸山プレーパーク／戸山あそび場	新宿区大久保	都立戸山公園	1998
プレーパークたいとうの会	台東区	区内の公園	2000
わんぱく天国	墨田区押上	わんぱく天国	1987
木場プレーパーク ほうけん隊	江東区	都立木場公園	2007
さるえプレーパーク／アソビバ江東	江東区毛利	都立猿江恩賜公園	2002
もっと遊べる5丁目公園の会	大田区中央	区立中央5丁目公園	1994
駒沢はらっぱプレーパーク／NPO法人プレーパークせたがや	世田谷区駒沢	区立駒沢緑泉公園	1985
KOPA(冒険遊び場と子育て支援研究会)	世田谷区松原	KOPA	2006
きぬたまあそび村／砦・多摩川あそび村	世田谷区多摩川河川敷	二子緑地ピクニック広場	1999
羽根木プレーパーク／NPO法人プレーパークせたがや	世田谷区代田	区立羽根木公園	1979
世田谷プレーパーク／NPO法人プレーパークせたがや	世田谷区池尻	区立世田谷公園	1982
烏山プレーパーク／NPO法人プレーパークせたがや	世田谷区北烏山	区立北烏山もぐら公園	1995
のざわテットーひろば／野沢3丁目遊び場づくりの会	世田谷区野沢	私有地提供	2002
せせらぎ冒険遊び場 他／渋谷の遊び場を考える会	渋谷区西原	渋谷区スポーツセンター 他	1996
渋谷はるのおがわプレーパーク／渋谷の遊び場を考える会	渋谷区代々木	区立代々木小公園	2004
夢発見! 草っパラダイス／台公園運営委員会	中野区上高田	区立上高田台公園	2003
のびっばひろばin井草森／杉並冒険遊びの会	杉並区井草	井草森公園	2000
のびっばひろばin柏の宮／杉並冒険遊びの会	杉並区浜田山	柏の宮公園	2000
池袋本町プレーパークの会	豊島区池袋本町		2003
石神井・冒険遊びの会	練馬区	都立石神井公園	2004
光が丘ひろっぱプレーパーク／みんなKilaKila子育てネット	練馬区	都立光が丘公園	2004
どんぐり山プレーパーク／立野冒険遊びの会	練馬区	区立立野公園	2004
北区で子どもの遊ぶ場をつくる会	北区十条台 他	桐ヶ丘中央公園 他	1997
あらかわ冒険遊び場の会	荒川区西日暮里	西日暮里公園	2009
足立に冒険遊び場をつくる会	足立区綾瀬	区立綾南公園	1993
にいじゅくプレイパークの会	葛飾区新宿	にいじゅくプレイパーク	1995
ゆきやなぎプレーパーク小松川の会	江戸川区小松川	区立小松川ゆきやなぎ公園	2004
発見きち／江戸川遊ぼう会	江戸川区西葛西	総合レクリエーション公園	1996
ひらこまはらっぱ／こまつなエコキッズ	江戸川区平井	ひかり児童遊園	2004
プレーパークむさしの	武蔵野市境	境冒険遊び場公園	2007
いちにち冒険あそび場／文化学習協同ネットワーク	武蔵野市	都立井の頭恩賜公園	2003
いけとおがわプレーパーク 他／NPOこがねい子ども遊パーク	小金井市	都立武蔵野公園	2003
わんぱく夏まつり／わんぱく夏まつりの会	小金井市	都立武蔵野公園	1975
国分寺市プレイステーション／NPO法人冒険遊び場の会	国分寺市西元町	国分寺市プレイステーション	1999
立川プレーパークを考える会	立川市若葉町	市立けやき台小学校 他	2001
地域にプレーパークをつくる会「どろんこの国」	日野市落川	市立落川交流センター	1999
みはらしプレーパークの会	八王子市	蓮生寺公園	2007
原町田冒険遊びの会	町田市	調整中	2008
三ツ又冒険遊び場たぬき山／子ども広場を考える会・あそべこどもたち	町田市成瀬	私有地提供	1999
相原冒険遊びの会	町田市相原町	相原中央公園	2003
きつねはらっぱ冒険遊び／野津田・雑木林の会	町田市野津田町	野津田公園	2003
やとっぱらあそびの会	西東京市谷戸町	谷戸せせらぎ公園	1998
自由遊びの会／小平プレーパーク準備委員会	小平市小川町	市立こどもキャンプ場	1998
東くるめ冒険遊び場づくりの会	東久留米市滝山	滝山公園バーベキュー場	2005
冒険遊び場・東村山	東村山市	都立東村山中央公園	2001
東大和七森プレーパーク	東大和市	下立野林間子ども広場	1999

出典:NPO法人「日本冒険遊び場づくり協会」HPより作成 (<http://www.ipa-japan.org/asobiba/>)

都市化が進む環境への危機感が、運動を進める原動力だった。1977～78年には、区民センター建設予定地で「桜ヶ丘冒険遊び場」を1年半にわたって運営し、「羽根木プレーパーク」の開設にいたった。このように冒険遊び場活動は、出発当初から、都市化と空間利用の在り方を問うものであった。

### (3) 「冒険遊び場」活動と歴史的社会学視点

図表-1は、2010年に「日本冒険遊び場づくり協会」に登録されている東京47カ所の一覧である。1990年代以降に活動団体が増えた。近年にさかんになった活動のようにみえる。しかし、中核メンバーたちに経験を聞いていくと、冒険遊び場活動を始める以前に、都市における他の社会的活動で経験を積み、活動のスキルを磨いてきた例をいくつもみることができる。つまり、都市における過去の社会的活動や歴史とつながった活動なのである。冒険遊び場の担い手に着目することによって、都市における社会的活動の経験がどのように継承されてきたか、歴史社会的な視点から考察を深めることができる。

また、「冒険遊び場」の担い手は、実際には女性が多い。女性や子どもの視点から、都市空間をどのように利用することが望まれてきたか、都市におけるジェンダー的な空間利用の問題の系譜を考察することができる。

日本では1970年代からのコミュニティ政策によって、コミュニティ施設が数多く建設された。生活・教育課題の変化にもなって既存のコミュニティ・センターや児童館にあきたらない人々が、オルタナティブな空間利用の在り方を求めて、模索している活動の一つが冒険遊び場といえるだろう。また、現在の子育て支援策や、放課後の遊び場事業、子どもの安全の問題など、家族のライフスタイルの変化にもなって生じているさまざまな社会問題が、1990年以降の冒険遊び場活動の拡大的背景になっている。

本稿では、このような関心から、都市における社会的活動の蓄積を考察するのに示唆的な事例を2つ取り上げ、「冒険遊び場」活動に関わるアクターの社会的性格を明らかにする。また、アクタ

一間の関係形成の過程から、次の活動世代を生み出すことにつながる社会的資源について考察する。第1の事例は、東京都心部の区立公園を利用して実施されている活動である。教育文化活動の歴史的蓄積との関連から考察する。第2の事例は、東京郊外地域の私有地で行われている事例である。私有地が提供された背景を、郊外の住宅地開発の歴史と関連させながら考察する。

本稿の内容は、2005～10年に筆者が首都圏10カ所で行った「冒険遊び場」活動の運営団体代表者、活動メンバー、私有地地主、公有地（公園）を提供している行政の担当職員などへの聞き取り調査と、収集した資料に基づいて記述した。

## 2. 事例その1

### ——都心における冒険遊び場と教育文化運動の系譜

#### (1) 「渋谷はるのおがわプレーパーク」の概略

「渋谷はるのおがわプレーパーク」は渋谷区の区立代々木小公園で開かれている。小田急線の参宮橋駅に近く、住宅地域・商業地域のなかの公園である。週6日開かれ、3名のプレーリーダーが常駐しており、常設に近い。大型用具が屋外に常置されている。プレーリーダーハウスや、子どもや親たちが参加して作り上げた塗り壁倉庫も設置されている。

運営は「渋谷の遊びを考える会」という市民団体である。会が発足したのは2004年であるが、発足の契機を作ったのは、長年にわたって都立代々木公園で自主保育の活動を続けてきた女性たちであった。

#### (2) 自主保育活動からの展開

##### (a) 自主保育活動

「渋谷の遊びを考える会」代表のKさんは、1970年代から渋谷区で「原宿おひさまの会」という自主保育活動に関わってきた。「原宿おひさまの会」は都立代々木公園を拠点にして、専従保育者と保育協力者の親が、3～6歳の幼児を保育する活動である。ほぼ毎日集まって、晴れていれば終日野

外で過ごす。会は1975年に始まり、30年以上存続してきた（原宿おひさまの会 2005）。

1970年代の第2次ベビーブームの時期には、幼稚園や保育園などの施設が不足した。そのような状況に加え、型にはまった幼稚園や保育園教育をあきたらなく感じていた親たちが、オルタナティブな子育て方法を追求したことが始まりである。毎月定額の保育料を集め、専従保育者を選任した。

「原宿おひさまの会」が結成されたのは、著名な小児科医の毛利子来医師がきっかけであった<sup>1)</sup>。毛利医師は原宿で開業していたが、高度経済成長期の昭和40年代に、原宿・代々木周辺の高層化・商業化が進み、患者として診察する幼児の身体や生活環境が都市化の影響を受けて、活気を失っていることに気がついた。高層住宅で密室的な育児が行われていることが原因であろうと考え、屋外で十分に身体を動かし、多くの人々にふれて社会性を育成することが必要と判断した。親や近隣の社会事業大学の学生が、リヤカーに子どもたちを乗せて、原宿の商店街を見て回ったり、寺院の境内や公園で遊ばせる活動が始まった。当初は原宿周辺の幼児や親が参加する「地域保育」としてのカラーが強かったが、次第に「野外の自主保育」としての特色が強まった。

副次的な効果として、母親たちの社会性や活動力が高まった。高度経済成長期に専業主婦として、社会から孤立した感覚に悩んでいた母親たちは、自主保育に参加することによって、自分自身と社会との関係を再構築し、活気を取り戻していた。母親たちの自主性、社会性も養成することになったのである。

話し合いで、活動メニューを決めた。子どもたちを預けっぱなしにするのではなく、自分たちでどう保育するか考えていく点に特徴があった。「自由な発想のできる子にしたい、世間の決まりきった価値判断に盲目的に従う子でなく、自分の頭でしっかり考える子」にしたいという共通の目的があった。子育てにおけるこのような価値追求は、冒険遊び場活動の「自分の責任で自由に遊ぶ」という共通のモットーと通底する。

自分の子どもが卒会した後も、Kさんたち複数

の親は自主保育活動、教育活動に関わり続け、2004年の「渋谷はるのおがわプレーパーク」の開設に至った。

「原宿おひさまの会」の理念に共鳴した親は、原宿から多少離れていても、電車に乗って子どもたちを連れてきた。その中に新宿区大久保の集合住宅に住む親たちがいた。山手線に乗って、高田馬場から通った。現在、新宿区の都立戸山公園でも冒険遊び場が開設されている。運営団体の「戸山遊び場」は、「原宿おひさまの会」の卒会生の親たちで、大久保に住む人々が中核メンバーになって始めたものである。「原宿おひさまの会」で培われた経験は、都心部における複数の冒険遊び場活動に脈々と流れ込んでいる。

#### (b) プレーパークを生み出した地域資源

「渋谷はるのおがわプレーパーク」が生まれる直接のきっかけになったのは、2000年代初頭に、「原宿おひさまの会」の卒会生の親たちが自主的に「子どもたちの居場所」に関わる活動に取り組み始めたことによる。渋谷区スポーツセンター内の使用頻度の低い空間や、設備の開放を求める活動を行っていたころ、文部科学省の「子どもの居場所づくり」事業が始まった。このような世相が追い風となって、冒険遊び場・プレーパーク開設の要望を出した。渋谷区議会での審議を経て、2004年度から実施されることになった。渋谷区では「青少年育成」項目の一つとして、「冒険遊び場」整備・運営を位置づけている。

「はるのおがわプレーパーク」というネーミングは、プレーパークが開設されている代々木小公園に文部省唱歌「春の小川」にまつわる歌碑があることによる。代々木周辺は「春の小川」ゆかりの地である。かつて、この周辺には河骨川という小川が流れ、渋谷川にそそぎこんでいた。黄色の花「コウホネ」が川辺に咲くことから名付けられたという。「春の小川」の作詩者であった国文学者の高野辰之は、代々木山谷（現在の代々木3丁目）に住み、子どもを連れて河骨川のほとりをよく散策したという。当時の風景から「春の小川」の詩想を得たと言われている。プレーパークは

「春の小川」にちなむネーミングによって、子どもに縁の深い地域というイメージを創出している。

このように「渋谷はるのおがわプレーパーク」の実現には、地域に蓄積されていた2つの資源が活用されている。一つは自主保育活動で培われてきた、人的ネットワークや個人の活動経験である。30年以上にわたって蓄積された人的資源が、2004年以降の冒険遊び場（プレーパーク）の活動を生み出した。また、ネーミングは「春の小川」ゆかりの地という歴史的資源を活用している。川が流れていたという空間的な特徴にまつわる歴史的資源である。このように、人的資源、歴史的資源が、時間的、空間的に連鎖し、冒険遊び場の出現に寄与した。さらに次の活動世代に受け継がれて、展開する可能性をみせている。

#### (c) イベント型まちづくりと地域資源

はるのおがわプレーパークが、2004年度から実施に至った背景には、「原宿おひさまの会」が生み出した、もう一つ別の資源が関連している。「原宿おひさまの会」の第1回卒会生が渋谷区議会議員になっており、区議会における審議の際に尽力した。1972年生まれの子で、母に連れられて1歳から「おひさまの会」に参加した。大学卒業後、博報堂に勤務し、2003年に渋谷区議会議員に当選し、現在に至っている。原宿の地付層であるHK議員の出馬は、原宿表参道の商店街振興組合の櫛会のバックアップによる。商店街の一軒が同級生の実家で、同級生とその父親が議員への出馬を勧めたのである。

HK議員は広告会社勤務の経験を生かし、イベント型の地域行事の企画に巧みである。HK議員は2003年に、NPO法人「green bird」を設立した。「green bird」は、ボランティアによる街の清掃活動を目的としたNPO法人で、表参道における清掃活動から始まった。同級生が関わる櫛会青年部の活動と連携して、表参道で活動を浸透させた。2009年度には全国27カ所で清掃活動を展開し、延べ約18,000人の参加者を集めた。多数の企業から協賛金を集め、社会的に広く認知された活動になりつつある。

渋谷区に国際交流で来日した子どもたちのなかには「green bird」の活動に参加したのち、はるのおがわプレーパークで地域の子もたちと交流するなど、HK議員が仲立ちになり、社会的な諸活動が有機的に連携している。

「春の小川」をめぐるのは、さらに次のような動きがある。渋谷・原宿・代々木周辺には、広告業界の事業所が集積している。その特徴を反映して、広告代理店関係者が企画する地域イベントや、運営する複数のNPO法人がある。そのうちの一つにNPO法人「渋谷川ルネッサンス」があり、暗渠化された渋谷川水系の存在を顕在化させ、水と環境の問題に関心を広げることをねらいとしている。2007年度から、「春の小川案内板プロジェクト」を始めた。これは暗渠となった「春の小川」を可視化させるため、代々木4丁目の水源地付近から渋谷センター街入り口あたりに至るまで、旧河骨川の暗渠に沿って、「春の小川」と記した30本の電柱広告を出したものである。

このように代々木小公園には、「春の小川」の歌碑があり、その名を冠したプレーパークがあり、近くには電柱広告が立っている。「春の小川」という地域の歴史的遺産を核に、複数の市民団体がそれぞれのイベント、企画を展開し、相互にゆるやかに連帯している。特徴的なのは、HK議員も含めて、複数の広告代理店関係者・出身者が関与していることである。イベント型まちづくりの展開例といえるだろう。

#### (d) ソーシャル・キャピタル

##### ——橋渡し型社会関係資本

##### (bridging social capital)

「春の小川」の事例で興味深いのは、複数のアクターの活動がリンクすることによって、どのような都市空間を実現したいのか、方向性が次第に明確になってきたことである。複数のアクターの「つなぎ」役となったのがHK議員である。地付層であり、「原宿おひさまの会」の卒会生であり、広告代理店出身者であり、渋谷区議会議員である。

議員活動においても、「おひさまの会」で育った経験や、冒険遊び場での経験を生かしている。

たとえば、2009年度の渋谷区議会での代表質問では、幼稚園・保育園の園庭の芝生化、小学校の校庭に夜間照明、区内の空き地を待機児童の保育施設に暫定利用することなどについて、提案・質問を行った<sup>2)</sup>。

HK議員が果たしている、諸アクターを「つなぐ」役割は、ロバート・パットナムが提示したソーシャル・キャピタル概念の、橋渡し型社会関係資本 (bridging social capital) ということができるだろう。地域に蓄積された人的資源、歴史的資源は、ブリッジングの役割を果たす次の活動世代を生み出している。

1970年代の「原宿おひさまの会」を出発点とする活動は、具体的な人間関係を通じて、脈々と伝わり、冒険遊び場を実現させ、都心部における地域資源の活用、地域活性化につながっている。

### 3. 事例その2

#### ——郊外の冒険遊び場と住宅地開発の歴史

##### (1) 「三又冒険遊び場たぬき山」の概略

「三又冒険遊び場たぬき山」は東京都町田市成瀬の私有地で月10回程度 (週2回、日曜日・その他) 開かれている。成瀬の住宅街の近くにあるなだらかな丘陵地の雑木林である。道具・用品を入れる倉庫が設置され、ツリー・ハウスや大型用具も屋外に常置されている。開園日は毎日ではないものの、常設に近い条件の冒険遊び場である。運営は「子ども広場を考える会・あそべこどもたち」という市民団体で、運営スタッフとして登録しているのは40人前後である。1997年から活動を始めたが、現在のたぬき山を活動場所として使用するようになったのは1999年からである。活動のことを聞いた地主のIさんから無償貸し出しの申し出があった。

##### (2) 私有地提供の背景

###### (a) 私有地提供者のライフストーリー

Iさんは地付層である。代々農業を生業としてきた成瀬の地主で、かつては米作・畑作、養蚕など

を行っていた。1935年生まれのIさんは1957年に教員になった。成瀬地区が急激に変化し始めたのは高度経済成長期である。住宅地、企業用地、学校用地など、町田市では大手デベロッパーの用地買収が進んだ。この状況を鑑みて、成瀬の土地所有者は区画整理事業に着手することになった。1968年に「成瀬土地区画整理組合」が設立されて、組合長となったIさんは、片手間では達成できない事業であると判断し、地域のことに尽くす決意を固め、退職した。区画整理事業と並行して、成瀬地区の記録を残す作業を続け、7年かけて成瀬村の郷土史を編纂した。区画整理終了後、町田市の教育長を12年間務めた。

###### (b) ローカル・アタッチメント

###### ——地域への愛着

1970年代に本格化した開発は、「まったくかかってない村の姿が出現しつつある」と思わせるものであった。首都圏の郊外地域に押し寄せた乱開発と、土地が住居空間として細分化されていく状況を目の当たりにした。父祖伝来のトータルな生活が営まれていた土地・空間が、業者によって切り売りされてしまえば、「良い地域社会」は維持できないという強い危機感を抱くようになった。

1960年代から成瀬の地主の間では、「ミニ開発でいい加減な町がつけられたのでは、将来いろいろ心配があるから、組合を作って区画整理事業をしよう」という話が持ち上がっていた。地付層の間では「町をつくっていくのは自分たちだ」「いい町をみんなの手でつくっていこう」という意識が非常に強かった。早期に協力して取り組んだおかげで、成瀬地区はミニ開発が少なく、区画の大きい良好な住宅地ができて上がった。成瀬駅の設置については、組合が10億円の負担金を出した。人任せの開発ではなかったのも、「自分たちが町をつくった」という思いを強く持つようになった。

以上のように、区画整理組合の責任者を務めたIさんの根底には、「いい町をつくる」、父祖伝来の土地・空間の価値を損なわないことへの強い使命感があった。

### (c) 自然観

Iさんはローカルな土地・空間が自然と深く関わっていることを、体験に根ざして理解している。「緑帯でお茶飲んでますとね。ウサギがね、野ウサギが行ったり来たりしたんですよ。それから夕方になると、コウモリが庭を飛んで。もう自然の中で動物と一体で住んでいるようなものでしたから」。このように自然の中で遊んだ記憶は、地域へ愛着を感じる根源の一つになっている。

区画整理事業では、用地の一定の割合を公園にするという規定があり、雑木林を整理して、公園を作った。しかし、そのような公園が本当に良いのかどうか考えるようになった。のちに、成瀬地区でフリースペースの活動を行っていた親たちが「本当の自然の中で遊ばせたい」と言っていることを聞いて、「そうだな、自分はさんざん、山を駆けずり回って、ガキ大将の後について遊んだな」と思い出し、私有地を提供したのである。

Iさんはローカルな土地・空間が自然と深く関わっていることを、独特の感覚で理解している。さまざまな動物との関わりを通して、「自然」に対する畏敬の念・親近感を抱いている。自然の力の大きさを実感することの重要性を知っており、冒険遊び場を通して子どもたちが「自然」環境に親しむことを支持するベースになっている。

### (3) ローカル・アタッチメントの交錯

運営団体の中核メンバーであるOさんは、3人の子どもの母親で、子どもの遊びに関わる活動に熱心に取り組んできた。「子ども広場を考える会・あそべこどもたち」の代表者のほか、「町田市青少年健全育成成瀬台地区委員会」、「子どもの権利条約をすすめる町田の会」、「町田市子どもセンターばあん運営委員会」などにも関わってきた。

成瀬に転居してきたのは25年ほど前である。成瀬の開発初期の流入者である。子どもたちはまだ義務教育段階だった。夫は海外出張や長期不在が多く、Oさんは育児ストレスになった。子どもが無気力状態になるなど、心配な状況が生じた。結果的にはボランティア体験や山村留学で危機を脱した。このような経験から子どもの環境に関心を

持つようになった。

Oさんが住んでいた成瀬・成瀬台地区は市民活動が盛んで、市民活動でデイケアセンター建設請願に成功した。Oさんは自治会からの要請で、青少年健全育成地区委員になった。地区委員会の活動に参加するようになり、地域社会の運営のしくみがOさんにも見えてくるようになった。地区委員会の活動は活発でイベントも多く、子どものことを真剣に考えていることが伝わってきた。子育て期を終えた人々が地域の子どもたちのために良かれと尽力する姿をみて、Oさんはそれぞれの人のミッションの自覚の深さに感銘した。

当時、町田市には児童館がないため、Oさんは子どもセンター設立について希望をとりまとめる担当になった。市が建設予定を発表したが、成瀬からは遠かった。

市の事業の範疇では、近くに遊びの拠点はできないことを悟り、Oさんが立ち上げたのが「子ども広場を考える会・あそべこどもたち」というグループである。1997年に小学校の校庭・施設を借りて、移動児童館のような活動を始めた。1998年からは、中学校の施設を借りて、フリースペースを始め、中学生の放課後の居場所づくりを始めた。

このように、Oさんは子育て中の葛藤を出発点として、徐々に社会活動経験を積んできた。成瀬地区の自治会活動を通して、流入者層の地区委員たちが、ローカル社会の運営に関心を持ち、地域社会を住み良いものにつくり上げて尽力している姿勢を知った。冒険遊び場を開設する以前は、流入者層からなる活動のネットワークを通して、活動者の幅を広げ、ローカル・アタッチメントを形成してきた。

遊びの拠点となる空間を求める活動に進展して、OさんはIさんのような地付層とコミュニケーションの機会をもつことになった。冒険遊び場開設の用地が得られたことも収穫の一つであったが、地主層であるIさんの土地に根ざした深い自然観を知った。Oさん自身の「自然」に対する理解は、自分の育児経験など、私的領域における活動に基づいて形成されたものであったが、Iさんとの交流を通して、自然に対する理解も幅が広がった。

Oさん自身のローカル・アタッチメントも、「ためき山」という具体的な土地・空間や、地付層との関係に根ざして、深みを増したものになっていった。

#### 4. 「都市空間とジェンダー」の歴史社会学 ——地域社会のガバナンスと ソーシャル・キャピタル

都心部と郊外地域の2つの事例を通して明らかになったことの一つは、高度経済成長期に、都市化にともなって生じた社会問題に直面し、解決の道筋を求めて取り組んだ人々の経験が地域社会に蓄積されていることの重要性である。原宿・代々木の自主保育活動、町田市成瀬の地付層による土地整備事業など、1970年代に地域社会の課題の解決に取り組んだ人々の思いが、冒険遊び場空間を実現させる原動力の一つになっていたことを本稿では明らかにした。

このような視点から、都市化の時期に展開した、さまざまな社会的活動の意義を再評価して見るべき時期に至っていると思われる。現在の生活課題の解決を求めているようにみえる活動であっても、担い手の系譜をさかのぼっていくと、都市における過去の社会的活動や歴史とつながったものであることが見えてくる場合がある。

本稿で取り上げた冒険遊び場の場合、女性や子どもと都市空間に関わる課題という特徴があった。これは1970年代に展開した教育文化運動の意義について再考するのに示唆的である。1970年代から80年代にかけて、地域における女性の教育文化運動が活発化した。その意義を考察することの重要性については、玉野和志が複数の論文で述べている(玉野 2000, 2002, 2009)。

団塊の世代が子育て期に入った1970～80年代は、子ども劇場や地域文庫の活動など、代表的な教育文化運動が興隆した。また、行政のコミュニティ政策によって、コミュニティ施設建設が進むなか、地域の女性による建設請願運動なども起きた。本稿で言及した「原宿おひさまの会」の自主保育活動は、この流れに含まれる。

ここで培われた諸資源が、「渋谷はるのおがわプレーパーク」の実現に結実していった。具体的には、区議会での審議を経て、「渋谷の遊びを考える会」という市民団体に区の事業を委託するかたちをとった。現代の課題である、市民と行政のパートナーシップの側面から、冒険遊び場が実現していった過程を評価することができよう。このように、冒険遊び場というオルタナティブな空間利用の実現をめざす活動は、行政と住民が対等なパートナーとして、地域社会のガバナンスをどのように実現するか、豊富な具体例を示している。

東京都の現状では、冒険遊び場は、都立公園、区立公園、市立公園など、公立の公園の空間を利用して開設されている例が多い。しかし、第2の事例で示したように、私有地提供の先例もある。私有地の提供の例は、住民が有するソーシャル・キャピタルとその可能性を示唆している。地域社会が包含している潜在的な資源の活用のしかたによって、地域社会のガバナンスの在り方も変わらう。第2の事例は、潜在的なソーシャル・キャピタルがどのような状況に基づいて顕在化していたかを示している。

本稿で取り上げた2つの事例は、それぞれの地域社会に蓄積された固有のソーシャル・キャピタルが時間的・空間的に連鎖して、冒険遊び場を実現させたことによって、さらに未来へむかって、ソーシャル・キャピタルの可能性を高めた例といえるだろう。

#### 注

- 1) 「おひさまの子どもとお母さんたち——ある自主保育の試み」(『暮らしの手帖』94, 1985, 暮らしの手帖社)。
- 2) <http://www.hasebeken.net/>, 2010年4月15日。

#### 文献

- 小野良平, 2003, 『公園の誕生』吉川弘文館。  
加賀谷真由美, 2001, 『子どもとつくる遊び場とまち』萌文社。  
梶木典子, 2003, 「都市における子どもの遊びの実態とプレイリーダーのいる遊び場の整備に関する研究」奈良女子大学大学院人間文化研究科生活環境学専攻博士論文。  
申龍徹, 2004, 『都市公園政策形成史』法政大学出版局。  
武田尚子, 2003, 「都市社会学入門——東京ぶらぶらフィールドワーク」『社会学と過ごす一週間』学文社,

- 174-190.  
玉野和志, 2000, 「地域女性の教育文化運動」『人文学報』399: 27-57.  
———, 2002, 「地域女性の教育文化運動から福祉ボランティア活動への展開」『総合都市研究』78: 119-128.  
———, 2009, 「郊外地区の形成と女性の地域活動の変遷」玉野和志・浅川達人編『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院, 245-264.  
成瀬郷土史研究会, 1985, 『成瀬』.  
日本冒険遊び場づくり協会, 2004, 『はじめよう! パートナーシップで冒険遊び場づくり』.  
羽根木プレーパークの会編, 1987, 『冒険遊び場がやってきた』晶文社.

- 原宿おひさまの会, 2005, 『原宿おひさまの会 30年史』.  
深水享子, 2002, 「住民グループと管理所の協働による都立戸山公園子ども遊び場の環境づくりについて」『都市公園』159: 32-37.

たけだ・なおこ 武蔵大学社会学部 教授。主な著書に、『瀬戸内海離島社会の変容——産業の時間とむらの時間のコンフリクト』（御茶の水書房, 2010）。地域社会学・都市社会学専攻。(ntakeda@cc.musashi.ac.jp)